

「地図の向こうにあるもの」を想像する力を

今尾恵介（地図研究家、フリーライター）

横浜市立中学校の1年生の頃。始まって間もない4月だったか。社会科の担当教諭が実物の2万5千分の1地形図「横浜西部」を携えて教室に入ってきた。授業中のどんな脈絡であったかは忘れたが、その地形図が前から順番に回ってきたのをひと目見て、その精緻な造りに私は完全に魅せられてしまった。

その授業からおそらく数日で横浜駅の地下街にある有隣堂で、自分の通う中学校の入った「横浜西部」と、父の勤務先の載った「川崎」を購入している。その直後には地形図の図式を真似て架空の地形図も描き上げた。同級生に「鉄道ファン」はいたけれど、地図マニアなど他にはおらず、家に帰ると自分なりの見方でひねもす眺めるしかない。ちょうど今の子がスマホやゲーム機で遊ぶようなものだから、ここで参考になる話ができるかどうかは疑問だ。

地形図で風景を眺めるのが趣味であった私にとって、自宅近くの丘陵地の微地形を味わうまでそれほど長い時間はかからず、だから「等高線が読めない」というのがどんな感覚なのか、正直よくわからない（イヤミで申し訳ない）。家での勉強時間はほぼ皆無に近かったが、母親は一切苦情を言わないばかりか、当時まだ北大教授だった堀淳一さんの『地図のたのしみ』を買ってきてくれた。おそらく当時エッセイストクラブ賞を受けられたばかりだったので書店に平積みしてあったのだろう。

本書を読んで、まずは自分と同じような趣味に没頭している人の存在が嬉しかったけれど、同じ趣味などといった失礼になるほど、楽しみ方のレベルは遙かな高みにあった。地図を軸に自由自在に駆け回る「堀淳一ワールド」に引き込まれてしまったのである。それまで目にしたこともなかったヨーロッパ各国の地形図がこの本のカラー口絵には満載で、いつかそんな地形図を入手して外国を歩いてみたいと切に思ったものだ。

この本の中に展開されていた世界に触発されたのは、たとえばあれこれの不思議な地形を味わうこと、個性的な市街地や農村などの地域、または街道の新旧のカーブの仕方などの変貌を新旧地形図を比較しながら観察すること、鉄道の線路のカーブのしかた—新幹線、JR在来線—といってもさまざまなので、いつ頃の時代に敷設されたか、私鉄を買収したか、私鉄なら汽車出身か「電気軌道上がり」か、などなど—による走り方の違い。そんなことを1銭の得にもならないのにあれこれ考える至福の時を地図は提供してくれる、ということであった。

お国ぶりを反映する色とりどりの外国の地形図を、独自の図式を解読しながら味わうこと、風変わりな地名（日本でも外国でも）を楽しむこと、地図の「デフォルメの仕方」の評論—見やすい地図とは何か—などなど、私がこれまで50冊以上のあれこれの分野にまたがる著書のテーマは、中学生の時に出会った堀さんのテーマからそれほど外れていない。

さて、私はアマチュアオーケストラの「新交響楽団」に所属しており、ここで打楽器を担当してまる 32 年になる。故芥川也寸志さんが長らく音楽監督として指導された団体で、芥川さんは「音楽はみんなのもの」という確固とした信念をお持ちであった。

考えてみれば音楽が「みんなのもの」であるのは当たり前なのであるが、特に西洋に淵源を持つクラシック音楽の世界は、そもそも「ありがたいもの」であり、プロの奏者が、プロの作曲家による、ひょっとしてプロにしか理解できない、しばしば難解な「高尚な作品」を、しかも勿体ぶって演奏し、それをアマチュアとしての聴衆はありがたく拝聴する、といった傾向に異を唱える問題提起であった。

芥川さんの師匠である伊福部昭さん（あの「ゴジラの音楽」の作者といえば通りがいいだろうか）の本で読んだエピソードを思い出す。ある歌舞伎役者（かどうかはっきり覚えていない）が、舞台を見た妻からの思いがけぬダメ出しに怒って「素人に何がわかるか」と気色ばんだところ、彼女は少しも慌てず、「だって、お客さんはみんな素人ですよ」と切り返したエピソードは痛快であったが、そんな精神と言い換えたらいいかもしい。

芥川さんがいつも強調していたのは、アマチュアという言葉はそもそも「愛」に由来するものであり、「それで飯を食っていないけれど、音楽を愛する人たち」こそが、みんなのものであるさまざまな作品を、ただ拝聴するだけでなく、自分たちのものとして演奏しようではないか、ということだ。新交響楽団はそんな精神の上にこれまで活動を続けてきた、と少なくとも私は思っている。

このアマチュア論に私は大きく影響を受けた。そもそも私は地図のことを題材にたくさん本を書いてきたが、もちろんプロフェッショナルではなく、ただの「物好き」である。しかし芥川さん流に言えば地図もまた「みんなのもの」である。しかも地図と音楽の世界が共通している点は、どちらも「ある奥深い世界」を記号だけで表現しているということ。もちろん記号の読みの深い—浅いによって、その描かれている世界がどれだけ深く読み込めるか、という点も共通だ。

もう 10 年以上も前のことだが、誰もが知っているベートーヴェンの小品「エリーゼのために」を、イェルク・デームスというオーストリアの名手が、東京のある小学校で演奏するのを目の当たりにしたことがある。もちろん、ちょっとピアノを習った子であれば、小学生でさえそれなりに音符を並べて「上手に」弾くことはできる。しかしデームスの音楽から私は、その四分音符ひとつ、八分休符ひとつに限りない奥行きを感じる事ができた。

誰が叩いても同じ音が出そうに見える鍵盤から、驚くほどの種類の音色が立ち上ってくる。職人技で丁寧な織られた極上の錦のような、とっては陳腐過ぎるかもしれないが、その音楽が、200 年以上も昔に記された「単なる記号の羅列」に過ぎない楽譜を手がかりに、熟練のマイスターはこれだけ再現することができるのだ。衝撃はしばらく消えなかった。

子供に聴かせる音楽は決して粗悪なものであってはならない。これは心ある音楽教師であれば心しているものであるが、記号でできた地図も、上質の良いものを与えれば、子供は無理しなくても、教え込まなくても、図上に描かれた「世界」をちゃんと読める才能を備えているような気がしてならない。

NHKテレビの「ようこそ先輩 課外授業」という番組に出演したことがある。私が卒業した横浜市立の小学校を訪問して地図を読む授業を行うという設定だ（教える素人の私が、であるが）。子供が地図につまづくのは、記号による「高度な抽象化」がネックだとかねてから思っていたので、なるべく大縮尺の、家が1軒1軒描かれた地図を与えることにした。

横浜なら古いものは3000分の1、今のは2500分の1であるが、これを大きな画板に貼り付けて各グループに分かれ、それぞれ指定された地区を回って長く地元にお住まいの人などに話を聴いては昔の話を聴き、今は使われていない昔の地名なども書き込む、といった作業をしたのだが、専門的に地図の読み方を習ったわけでもない小学5年生たちが、実にきちんと2500分の1地形図を、しかも自然に読んでいるのには驚かされた。方向感覚もまったく迷がないのである。

地図というのは、この世を記号化したものであるから、素直に読めばすんなり頭に入ってくるはずだ。読めれば嬉しい。その嬉しい感覚を獲得したら、あとは何も要らない。地図から未知の世界を想像する楽しさを味わえるようになるのは、もう時間の問題である。それをひょっとして地理分野の授業は邪魔していないだろうか。ひょっとして記号や図法の名前、ケッペンの気候区分を、小麦の生産高のランキングを、採点に便利だからと、わけもわからずに丸覚えさせていないだろうか。

地図は描いてあるままに読めばいい。読めないというなら、かなりの確率で地図の方が悪い。だって地図はアマチュアであるふつうの人間のために、まさに「みんなのもの」として作られているはずのものだから。「読めた喜び」さえあれば、あとの瑣末なことは勝手について来る。

ハザードマップなんて習っていないから読めません、といった大人を作ってはいけない。地図を読めれば自分や家族、そして回りの人たちの命を守ることにもつながってくる。火山活動がこしばらく活発になり、地球温暖化の影響か、激甚な土砂災害も増加傾向だ。たとえば非常時にあって、音や文字による「点と線」による伝達手段は、地図の持つ広域、同時に、しかも感覚的に情報を伝える能力に到底及ばない。その優れた媒体である地図を瞬時にして読めることが、どれだけ重要なことか。もちろん紙かディスプレイといったメディアの違いなど、ここでは瑣末なことである。

昨今、大学教育がおかしな「改革」にさらされている。特に経済界の要請は即戦力を欲する傾向を年々強めているように思われるが、「すぐ役立つことはすぐ役に立たなくなる」という指摘もしばしばなされる。これは重要なポイントだろう。

昨今ではデジタル全盛で、一見してダイナミックな世界が目の前に表示される至れり尽くせりのグラフィックが地図の分野でも提供されるようになってきた。一見すばらしいことではあるが、地図に描いてある「記号群」から実際の風景を想像できる、という旧来からの地図読みの能力が鈍磨することにならないだろうか。

単なる記号群からあの深遠な世界を引き出したイェルク・デームスの「エリーゼのために」が、私の地図の読み方―遊び方にとっていつも見事なお手本であり、また大切な警句でもある。